Ray

Sir.Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒａｙ

【Ｎコード】
Ｎ４７４２Ｋ

【作者名】
Ｓｉｒ．Ｆｅ

【あらすじ】
忘れられた英雄と、忘れられた少女、二人が出会ったことで時は動き始める。

Section1（前書き）

小説第三弾！

駄文ですが、よろしくお願いします。

Section1

力とはどういったものだろうか？
敵に打ち勝つためのものか？？？？。
立ちはだかる壁を乗り越えるためのものか？？？？。
大切なものを守るためのものか？？？？。
否。力とは、全てを蹂躙し、排除し、破壊するもの。力に対象は無く、只そこに在って、絆も、信条も、信念も、なにもかもを打ち砕くものである。古の頃より、人は力を求め続けた。しかし、大きな力は災いを呼び、より大きな力によってその頂点の座を奪われる。
？？？？力ある者の末路は、いつの時代も悲惨なものである。
？？ジョージ＝シェルマン博士著
「王者の条件」前文より抜粋？？

前兆

弱者は力を畏れ、強者を遠ざける。
力を持たぬが故に、否応なく淘汰の道を通る。
運命を嫌うが、逆らうことはせず、ひたすら他者を利用することにのみ力を注ぎ、自らを磨くことはしない。
過去の王と呼ばれる者の中で、強者であった者は少なく、その浅知恵の犠牲となった者は数知れず。
魔族も彼の悲劇と共に葬られた。裏切りの汚名、逆賊の烙印よりも、忘れ去られることは辛い。
忘却とは罪である。我々の存在を否定する全ての者に知らしめよう。
？我らはここにいる？と。
これより、我ら〈魔爪〉は全ての咎人に対し宣戦する。

といった文書が、エキドア公国西部の街、フォークテンシャーにある軍基地の一室に持ち込まれた。
先日、私たちの国だけでなく、周辺諸国にも送りつけられたこの手紙は、現在、上層部の優先議題として、内容の真偽と組織の目的などを探っている段階だ。
「どう思われますか。フリットマン大佐」
「ただのチンピラにしては、言うことがでかい。取るに足らず、と捨て置くには否定要素が少ないな。それに〈帝国〉のこともある。〈魔爪〉がある程度の戦力を保有し、我々に対し攻撃行動をとると考えた方が賢明だと思うが？」
自分の個人用オフィスなのだろう。フリットマン大佐は、部屋の奥側の自分の椅子にどっしりと腰を落ち着かせている。しかし、その視線は机の上、問題の文書に暇もなく注がれている。右の頬の横一文字の傷は、先の大戦中についたもので、回復魔術でも消えないらしい。胸につけた数々の略綬よりも雄弁な勲章だ。先の大戦を生き抜き、この地位まで登り詰めた、まぎれもなく歴戦の勇士だ。
「ところで中尉。この組織がアレを狙っているというのは、事実なのかね？」
鳶色の目がこちらに向く。射抜かれたかのように戦慄が走った。それでも、あくまで冷静に返答する。
「はい。まだ裏はとれていませんが、可能性はかなり高いかと」
それを聞くと、一瞬ためらうように俯き、決心したように切り出した。
「レイに依頼しよう。これは、彼の分野だ」
「レイ、とは？」
「君のセキュリティパスのＬｖは？」
「Ｌｖ２です。大佐」
「ふむ・・・。ときに、中尉は結婚されているかね？」
「い、いえ。それが関係あるのですか」
「家族と別れるのは辛いかね？」

「・・・軍人になったときから覚悟はできています」
「それなら、話しても良いかもしれんな。これから話すことはＬｖ１の機密だ。だが、君を信頼しよう。心して聞け」

Section2

それは、私が信じてきた世界が全て嘘だ、と言われたも同然だった。
「大佐。この話、眉唾だと言われても仕方がないですよ」
「中尉、君の言いたいことはよくわかる。しかし、これが真実だ」
力の込もった肯定は、嘘を話したと言っているようには思えなかった。
「では、その・・・ストライフ少将が、未だに生きておられると？」
「そうだ。彼は今も独立奇兵隊の隊長をしている。
この件は私から彼に伝えておこう。君はなにも知らない。上に聞かれてもこのことは話すな。そちらはそちらで対策を講じろ。いいな？」
「はっ。了解しました」
すると彼は、満足したように席を立ち、私を出口に促した。
「安心したまえ。彼に任せておけば直に解決する。君が上官に怒られることもないだろう。」
「・・・わかりました。それでは、失礼いたします」

「はぁ」
外に出ると思わずため息がこぼれた。正直、大佐はかなりのプレッシャーを放っていた。さすがは〈Ｓ／ｒａｎｋ〉。自分は未だに〈Ａ／ｒａｎｋ〉を抜けられない中位の魔術師だ。それでも、大佐との実力差がかなりあるということくらいはわかる。
先程の話、真実だとしたら・・・。仕事柄、こういった機密情報に触れているとはいえ、これはかなり危ない状況なのではないだろうか。それに、大佐の質問も気になる。まるで、もう親しい者には会えなくなると言われているようだった。考えるほど、思考は堂々巡りだった。出口を見つけるには、まだまだ時間がかかりそうだ。

だが、まずは部長への言い訳を考えなければ・・・。

「レイ、君か？

？？？ああ、そうだ。また君に借りが増えてしまったな。

？？？そうだ。？？？魔族が絡んでいる可能性がある。？？？ああ。

？？？それから、君のことを知った者がいる。アレックス＝カーク中尉。所属は本部の諜報部、〈Ｘ－ｐｏｓｔ〉だ。？？？ああ。保護を頼む。？？？ああ、君の裁量で決めてくれ。手配は私がしよう。

？？？頼んだ」

受話器を置き、背もたれに体を預け、しばらく天を仰いだ。こういう時間は、私に失った戦友たちを思い出させる。多くの命を奪ったあの戦争は、悲惨なものだった。ろくに扱えもしない広域攻撃性魔具を持ち出して、自ら滅びた国もあった。〈帝国の牙〉は確かに私たちの喉元に届いた。彼がいなければ、噛み切られていたかもしれん。

？？力ある者の末路はいつの時代も悲惨なものである？？とは、シェルマン博士の言葉だったか。

「博士は正しかったのかもしれんな」

再び天井を見上げ、思索に耽った。

？？？アレックス＝カーク中尉が、エキドア共和国軍本部から姿を消したのは、それから一週間後のことであった。

Section3

なぜ歩く？
？？欲しいものがあるからさ
親かい？
？？いいや、僕の親はもういない
友情かい？
？？いいや、友なら君がいる
自由かい？
？？いいや、今でも自由だよ
愛情かい？
？？いいや、愛は在るものだ
お金かい？
？？いいや、それなら働くさ
食べ物かい？
？？いいや、それなら獲ればいい
じゃあ、なんなんだい？
？？誇りだよ。僕が僕であるために、僕を讃えるものが欲しい
？？クルツ＝エルベン作
「ＴＲＡＭＰ」第二章より抜粋？？

邂逅

「みんな、席について」
私たちの担任のケイン＝ファルメット先生は、普段より大きな声で言った。
「今日は、転校生を紹介します」
教室に微かな驚きの声があがる。と同時に、全員の目がドアから現れた青年に集中する。

「それじゃ、自己紹介を」
「アクスフォード＝レイ＝ストライフです。よろしくお願いします」
「彼は、ハーミットケイブの出身です。知らないこともあると思うので、その都度教えてあげてください。逆に、みんなが教わることもあるかもしれません。お互いに助け合って生活していきましょう。それじゃ、彼女の隣の席に」
そう言って、私の右横の席を指差した。
「はい」
彼は私の方にゆっくりと歩いてきた。
「私はソフィア＝アークバイン、よろしく」
彼は、何も言わずに私を見つめ返してきた。不覚にも、私はその顔の精巧さに息を呑んでしまった。背中の辺りで束ねた腰まである濡れ羽色の髪も、同じように綺麗で、中性的な印象を受ける容貌だった。でも、目は違う。異様なまでに紅く、鋭い光を放っていた。私たちとはまったく違う生き物なのではないかと、幼い子供のような想像をしてしまう。それはないでしょと、変な考えはすぐに消した。でも、その目に全てを見透かされているようで、落ち着かないのは確かだった。だけど、自分から目を逸らすまいと、その瞳を睨み返した。すると、彼はふっと笑って、前に向き直った。
なんだ、こいつ？
「？？？〈　　〉」
「えっ」
「忘れるなよ」
こいつと関わりを持ってしまったことが、私の運の尽きだったのだと、今ならはっきりと言える。

私の通うこの学校は、エキドア公国の一都市、エレミアにある最もレベルの高い学校で、優秀な人材を世界に輩出している。
ここエレミアには、たくさんの学校が存在する。その数、なんと五十三校。人口の約八十五パーセントが学生という、ちょっと異常

な街。でも、学生の自治が幅広く認められていて、私たちにとってはけっこう暮らしやすい街だ。ここでは、生徒会と、その実動部隊の風紀院が、かなりの力を持っている。ここの治安は生徒会が維持していると言っても過言じゃない。だからこの街は、自他ともに認める、学生都市エレミアなのである。

学校が五十三もあると、それぞれに特色が出てくる。魔術、工学、化学、生物、医学、薬学、経済、哲学、法学、芸術、文学、戦闘など、それぞれ得意な分野、専門を持つ学校が多い。しかし、私の通う国立エレミア第一魔術学校では、全ての科目を教えているうえに、どの科目も専門の学校並の結果を収めている。

特に、ここは魔術に力を入れていて、この学校の魔術科の生徒＝魔術のエリートといっても過言ではない。自分で言うのは少し恥ずかしいけど、これは公然の事実として、エレミア以外の都市でも知られている。

その中でも、ストライフは典型的な優等生だった。その頭脳は、あらゆる意味で飛び抜けていた。

「先生」

ほら来た。

「その魔力変換効率の計算ですが、この場合フュース方式ではなく、レストン方式で行った方が適切です。フュース方式は攻撃系魔術に対応したもので、補助系である付加魔術への変換効率を正確に算出するのは難しいと思います」

といった感じで、転校してすぐ、先生キラーという物騒なあだ名を付けられたほどだ。ちなみに、私の筆記の成績は、校内でトップ5に入るくらいだ。しかも、私以外の四人とも上級生だから、私ってけっこう頭がいい？とか思ったりしていた。だけど、彼が現れた。まさに青天の霹靂、寝耳に水だった。私の自信は一瞬にして崩れ去り、自分が凡人でしかないことを思い知らされた。正直、彼の頭脳には追いつける気がしない。

だけど、天は人に二物を与えないとはよく言ったものだ。確かに

学で彼に勝てる者はいないだろう。しかし、魔術や武術まで出来るとは限らない。
「彼、ハーミットケイブ出身でしょ。魔術が出来ないってことはないと思うよ。それ以前に、ソフィアより魔術が使えない人はまずいないと思う」
と、悪友のアイカが指摘してきた。アイカは、いつも一言多い。
「・・・」
「ふてくされない。ソフィアにはアレがあるじゃん。今も無敗を誇るものが、ひ・と・つ・だ・け」
「だけとか言うな。というかアイカ、それ言ったら怒るって、この前言ったばかりでしょ」
「ごめんごめん。でも、強いのはほんとじゃん。男子にだって、素手の喧嘩なら一度も負けてないでしょ」
「それ、この前も言った」
そう、三日ぐらい前、どういう経緯でその話になったのか忘れたけど、『魔術無しなら、校内最強だよ』と、アイカが言ってきた。『絶対に違う』と答えた私に、あいつは『女の子として、どうかと思うよ』と、そのまま続けた。私が、『普通の女の子より、ちょっと喧嘩が強いだけだって』と穏やかに反論すると、哀れなものを見るような目で私を見てから、ため息をついて私の肩をポンポンと叩き、『きっと、ソフィアのことをわかってくれる人がいるから、諦めちゃ駄目だよ』とありがたいお言葉をくださった。
「思い出したら、また腹が立ってきた」
「ソフィア、落ち着いて。この前のは、あなたと組み手を組まされたので、十分償ったでしょ」

Section4

昼が終わると、戦闘の分野に含まれる、格闘の授業だ。
この学校は皆兵制度指定校になっていて、軍事訓練の必修単位がいくつか存在する。格闘もそのひとつで、これを基本に魔術戦闘や、通常武器戦闘に進む。
ここ最近、帝国との緊張が再び高まってきている。それが、この制度に拍車をかけた。以前の戦争では、エキドア公国は三度、帝国に侵攻され、始めの一回は首都の目の前まで詰められている。しかし、残りの二回は、一人の英雄が率いる義勇軍によって、国境線で防いだらしい。正式には、正規軍が追い返したことになっているが、義勇軍に参加していた人達は口をそろえて、『准将が助けてくださった』と報告したらしい。
まあ、それが正規軍のプライドを大いに傷つけ、普段の訓練がだいぶ厳しくなったという話もあるほどだから、本当の可能性は高いと思う。
そして、義勇軍の活躍と、帝国の軍備増強の情報から、大公様たちはこの制度の指定年齢を引き下げ、限定的に適用することにしたそうだ。
ところで、だいぶ逸れてしまった話を最初に戻したいと思う。そう、天は二物を与えないという話だ。いま、私は彼と組み手をしているんだけど・・・強い。その一言に尽きる。拳は全て防がれ、掴みにいけば躱され、逆に投げられる。それでも、手加減をしている感じがある。なんとなくだけど、私の動きを全て読まれている気がする。
「なんで、本気を出さないの！」
そう言った私をあの時と同じ眼が、鋭く貫いた。
「お前が弱いからだ」
耳元に囁くような声が聞こえたと思った瞬間、目の前に青い空が

広がっていた。
「くっ」
思わず声が漏れてしまう。
「無理するな。倒れておけ」
私だけに聞こえるようにそう呟いた。
「すげぇ。あのアークバインに勝ったぞ」
誰かがそう叫んだのが聞こえた？？？暗転。

目が覚めた時には医務室にいた。
「大丈夫、ソフィア？」
聞き覚えのある声が聞こえた。
「へいきへいき。もう起きられるよ」
そこで、自分の体が動かないことに気付いた。
「どうなってるの？」
「うーんとね、先生が言うにはストライフ君の技が、ソフィアの身体にかなりのダメージを与えたんだって。でも、極度に疲労させただけで、怪我に繋がるものでもないって言ってたよ」
彼に手も足も出なかった。それどころか、手加減してもそれだけのことが出来るというのは、私の常識の中での強さを軽々と越えている。
「負けたんだね、私・・・」
「・・・」
「なんだかんだ言っても、自信あったんだけどなぁ」
「強くなりなよ。勉強も、格闘も、魔術は無理かもしれないけど、頑張ってストライフ君に勝ちなよ」
そう、なんだかんだ言っても、最後の最後に私を励ましてくれるのはアイカだ。
「わかった。強くなるよ、絶対」
このときのことは、今でも忘れない。
その後、しばらくは平穏な日々が続いた。私は、約束通りという

か、決意を固めて今まで以上に勉強も格闘も頑張った。相変わらず、彼には勝てないけど。それでも、充実した、楽しいと思える日々が続いていた。
　そんな中、ひとつだけ変わったことがある。いつも女生徒に取り囲まれていた彼が、何かにつけて誘いを断り、私たちにくっついてくるようになったのだ。
「アークバインさん」
　後ろから声がかかった。
「ソフィア」
「あ、すいません。それで、ソフィアさんが魔術を使えないって、本当なんですか？」
　ブチっと何かが切れる音がした。
　隣のアイカが大きなため息をついたことにも気付かない。
「ま、待ってください。そういうつもりで言った訳じゃないんです」
　歩き出そうとする私を、彼が呼び止める。
「一緒に練習しませんか？」
「あなたにはメリットがないじゃない」
　全てにおいて、私に勝っているんだから。
「ソフィアさんと一緒にいると、楽しいんです。ですから、お願いします」
　一瞬と少しの間、唖然としてしまった。何を言い出すんだこいつは、というか、周りの女子の視線がとっても痛いです。
「駄目でしょうか？」
　うっ、と詰まってしまう。その顔はズルい。
「好きにして・・・」
　一刻も早くこの場を離れたかった。
「本当ですか！
　ありがとうございます。詳しいことは後で決めましょうね」
　そう言って、彼が背を向けた瞬間、アイカに声をかける。
「逃げるわよ」

この後起きるであろう、質問、詰問の嵐を予想して、いや確信しての発言だった。

この嵐は数日間続きそうだ。

Section5

「ストライフ君の人気は凄まじいね」
「あれのどこがいいのかわからん」
「顔良し、スタイル良し、成績優秀、魔術も喧嘩も強い、それに性格もいいじゃん。スターの素質十分。というか、もうアイドルだよ、彼」
性格がいい？
「あいつ絶対猫被ってる。だって二人のとき、命令口調だよ」
「なっ・・・」
予想外のリアクションを示したアイカに、私の方がビックリしてしまう。
「ソフィアに春が来た！」
正気に戻ったかと思ったら、また変なことを叫び始めた。
「ソフィア、絶対捕まえるんだよ。彼みたいないない男、そうそういないからね」
「アイカ？」
「でも、まさかストライフ君がソフィアと・・・」
また、よからぬことを考えてる気がする。
「応援してるよ。周りの女の子たちの反応が怖いけど、私はソフィアの味方だからね」
「えーっと、何の話？」
頑張って、ともう一度言ってから、アイカは自分の家の方に帰っていった。
「何だったの？」
いつもの鐘の音に思考を中断する。
「そろそろ私も帰らないと」
急いで寮に向かった。

ストライフの行動に対する、私への嫌疑が晴れ、彼女達の関心が再び彼に注がれ始めた頃、私は呼び出しの手紙を受け取った。いつの間にか、机の中に入っていたのだ。ちょっと怪しいなとは思ったけど、まあ大丈夫だろう、という根拠の無い自信に後押しされ、これが私の運命の分岐点になるとは露知らず、指定の場所へ私は来てしまった。

誰からなんだろう。まだ相手は来てないみたいだし・・・。

「お前が風の〈化身〉か」

まさか人がいるとは思わず、驚いて辺りを見回すと、向かい側のゲートにどう見てもこの学校の生徒ではない風貌の男が立っていた。

「化身・・・人違いではないでしょうか？

学校の人間には見えませんが、あなたがあの手紙を？」

男は、私を見ているだけで、答えなかった。腹が立ったので、次は強めに尋ねた。

「用件は何ですか？」

「必要なことには思えないがな」

返ってきた言葉は、またしても私の質問への答えではなかった。

帰ろうと背を向けると、急に寒気がした。身の毛が弥立つとは、こういうことをいうのだと実感する。『危ない』私の直感がそう告げていた。

「な、に、それ」

振り返ると、男は右手を頭上に掲げ、巨大な蒼い火球を創り出していた。

「抵抗するか？」

挑発する意図があるわけでもなく、ただ尋ねてきた。

？？異様だった。いきなり、攻撃魔術を発動させることも、その魔力の練り方も、纏っている空気も、底の見えない青い瞳も、その存在が、どこまでも異常だった。

「なんで、こんなことを？？」

「？？僕が僕であるために、僕を讃えるものが欲しい？？」

「え？」
「そう言っていた奴がいたな」
独り言のようにそう答えた。それが、質問への答えなのかどうかは、もうどうでもよかった。
「せめて、安らかに逝け」
すでに、人一人を十分呑み込めるだけの大きさになっている火の玉が、私に向けて放たれた。
視界を埋める蒼を見るのが怖くて、反射的に目を閉じた。
「邪魔が入ったか」
「え？」
目をゆっくりと開けると、水の壁が私を火球から守っていた。
「まあいい」
男は身を翻すと炎と共に消えた。正確には、転移かなにかの魔術を使って。そして、男が立っていた場所には、一本の槍が刺さっていた。
「消えたか」
声は上の方からだった。外壁から、人影がこっちに下りてきた。
「無事のようですね」
答えられない。
「無理もない、歴戦の魔術師ですらあの男の前では萎縮してしまうでしょうから。でも、間に合って良かった」
本当に安心したようにそう呟くのを聞いて、お礼をしなきゃと思った。
「助けてくださって、ありがとうございます」
「気にしないでください。私はこれで失礼いたしますので」
そう言って、すたすたと、何事もなかったように歩き出した。ちょうど男が消えた辺りで立ち止まり、パチン、と彼が指を鳴らすと、石畳に刺さった槍が水になった。そのとき初めて、その槍が氷でできていたことに気が付いた。
「それでは」

その人がそう言って指を鳴らすと、その水たまりに沈んだ。
「一体、なんだったの？」
自分の身に起きたことに理解が追いつかない。しかし、体は小刻みに震え、立っているのがやっとだ。
しばらくしてから、ここにいると、またさっきの男がやってくるかもしれないということに気付き、慌てて寮に帰った。

Section6

次の日、昨日私を助けてくれた男の人のことを、魔術D担当のサリエラ先生に一部のことについてだけ尋ねた。いつまでも、震えているのは我慢ならない。私に何が起こっているのか、とりあえず知りたかった。

「その方は、少なくとも〈AAA／lank〉以上の魔術師でしょうね。水の壁は、水属性B級防御魔術、精巧な槍は、氷属性A級創造魔術、水たまりに消えたのは、水属性A級転移魔術、違う属性のA級魔術を無詠唱で使える魔術師なんて、そうはおられませんからね。そういえば新任の講師の方が、〈S／lank〉の魔術師だったわ。向こうの都合で、昨日か一昨日に到着されて今日着任のはずですよ」

ということらしい。私を助けてくれた男の人は、やっぱりかなり高位の魔術師のようだ。

「ところで、どうしてそのようなものを見たのですか？」

と、追求がきたところで、職員室まで全力で走った。

「失礼します！」

気が急いて、声が大きくなり過ぎた。静かな部屋に、私の声が響いていて恥ずかしかったけど、それよりも確かめたいことがあった。

「アークバイン、静かに入って来れんのか」

隣のクラスの担任が注意してきたのを無視して、仲の良いヴァーモット先生に声をかける。

「先生、ちょっといいですか」

「おう、構わないぜ」

教師というより、軍人といった体格の男が応じた。その喋り方など、数々のユニークさで生徒の人気を集めている先生だ。

職員室まで来てもらい、あの人のこと、講師のことを話した。

「確かに、そいつはかなりの使い手だろうな。んで、サリー先生の

言う通り、新しく来た講師は〈Ｓ／ｌａｎｋ〉だ。だが、生憎もう帰られたがな。お前のクラスは明日講習があったろ。そんときに確かめりゃいいんじゃねえか？」
　そういえば、朝そんなことを言ってたような気がする。
「そうします。先生ありがとう」
「いいってことよ。んじゃ、気い付けて帰れよ」
「はい」
　寮に帰るとすぐに、ベッドにもぐりこんだ。もちろん、シャワーは浴びたし、着替えもしたけど。
「明日の講習は・・・『魔術の効果的な使用法』かぁ。魔術が使えない私には、あまり関係ないなぁ」
　そう、私はなぜか魔術がほとんど使えない。これのせいでよくからかわれた。それを黙って聞いていられない私は、よく相手と取っ組み合いの喧嘩をした。そのおかげで、今では校内最強なんて呼ばれてるんだけど。まあ、この前あいつに完敗しちゃったから、最強の称号ともお別れなんだけどね。
　ふと時計を見ると、日付が変わろうとしている。
「寝よ」
　そのとき気付いた、興奮して寝むれないことに。あの時の光景が眼に焼き付いている。死というものを、この十六年の間で一番身近に感じた。気持ちが昂って、とても寝れるような状態にならない。
「？？？何？」
　急に、部屋の空気が変わった。息苦しくなるような得体の知れない魔力を感じる。
　無意識に、身構えた。ううん、恐怖で体が強張ったといった方が正しいと思う。
　？？？この魔力を私は知ってる。
「！」
　それに気付いた瞬間、何かによって強制的に意識を手放すことになった。

Section7

??あなたは誰？
風に吹かれて儚く揺れる
水面に映った月のような
明るく暗いところにいて
私の名前を呼び続けてる
??あなたは誰？
??ミシェラ＝ブーネ作
「光と影」序幕　冒頭より抜粋??

告知

意識が覚醒すると同時に、私は跳ね起きた。周りを見回すと、昨日と同じ、何も変わらない私の部屋だった。彼がいること以外は。
「起きたか」
「な、なんでいるの！」
「ほう、お前は恩人に対してそんな口をきくのか」
「おんじん？」
「昨日襲われただろう？」
「そうだ。あいつは？」
「あいつ・・・ああ、ウェルトのことか」
「ウェルト？」
「身の丈ほどある刀と、蒼い炎を使う」
「そいつよ。そのウェルトってやつがいたはず・・・」
「あいつなら、俺が来たのに気付いて逃げた」
「逃げた？」
「不満か？まあ、助けはいらなかったというなら、感謝なんかしなくていい。俺も仕事で助けただけだからな」

「いや、その、ありがとう。でも、なんであなたがここにいるの？」
口調や態度が荒っぽいバージョンの方になってるけど、間違いなく、そこにいるのは同じクラスのストライフだった。
「仕事だと言ったはずだ」
釈然としないものを感じながらも、会話を続ける。
「その仕事とやらを聞きたい訳なんですけど」
「それは仕事に含まれてないな」
「せめて、私に何が起きているのかぐらいは」
「まあいい、今後のことがあるからな」
彼は、一拍おいてから話し始めた。
「まず、魔術がどういうものか知っているか？」
「バカにしないでよ、これでも学年二位なんだから。
えっと、魔力によって万物の要素や、精霊に働きかけ、そのエネルギーを使って様々な現象を起こす業、でしょ」
「基本的にはそれでいい。では、魔力とは？」
「えーっと、魔術のための燃料？」
「本質的には生物の精神力、意志や覚悟など、そういったものの総称だ。個人差はあるが、本来、魔力は全ての属性、系統の魔術に対応している。だが、稀に何かひとつのものに最適化した魔力を持っている者がいる。そういう奴らを、特異魔力保持者と呼んでいる。お前のことだ、ソフィア＝アークバイン」
「えーっと、私がそのなんとかっていう奴だっていうの？」
「厳密にいえば、お前は〈化身〉だ」
「・・・？」
「〈化身〉。特に強い特性を持った特異魔力保持者のことをそう呼ぶ」
「で、私がそのなんとかってのだから、あいつ、デシムが来たの？」
「ああ、そういうことだ」
「はあ。まあ、ある程度の状況が分かったから、少しはスッキリしたかな」

「驚いたり、慌てたり、怒ったり、嘆いたり、人間とはそういう反応を示す種だと考えていたが、お前は違うようだな」
「そうしたいんだけど、こういう時に取り乱したらアウトかなと思ってるから・・・。というか、あんたこそ何者？」
一番の疑問を、やっと口に出せた。
「それを知ったら、後戻りはできなくなるが、いいんだな」
強い口調で確かめてきた。そう問われると、踏みとどまりたくなる。だけど、答えはもう出ている。どちらにしろ、もう戻れないだろう、という確信があった。
「いいわ。聞かせて」

Section8

「左手を出せ」
「え？」
彼はもう一度は言わなかった。おとなしく従って、左手を出した。
「？？？.我が血を証とし、我が体を協翼の誓とする。これは永久の始まりであり、永遠の終末である」
「なっ、契約なんて聞いてない」
しかし、彼に握られた左手は逃げることができなかった。
「？？？.我、汝の契約者」
文言を呟きながら、私の左手にキスをした。
と同時に、やっと解放された左手で、とりあえず殴った。
「何をする？」
「こっちのセリフよ！
いきなり、なんてことすんの。契約って言ったら、魔術師にとって将来を左右する大事なものなのよ」
「そうか」
こいつ、反省してない。
「そうか、じゃない」
今度は右で殴ろうとしたが、止められた。
「女のくせに、随分荒いな。まあ、それは後にしよう。
あえて言うが、今のお前じゃ絶対に殺される。だが、契約しておけばいつでも俺を呼び出せるし、お前が俺側に避難することも可能だ。それに、これからもお前は狙われ続ける。強くなっておいて損はない」
「あんたが、あいつより強いなんて保証はないじゃない！」
掴まれた右手を引っ張って勢いを付けた左手で、パンチを再度試みた。しかし、またも受け止められた。
もう、なんで怒ってるのかすら分からなくなってきた。

「いいか、よく聞け！」
掴まれた両手が痛い。それで、はっと我に返る。
「一つ、言わなかったことがある。〈化身〉が死んだ時の話だ」
「私が、死んだとき？」
「お前が死ねば、その魔力を狙って精霊が集まってくる。そして、精霊同士の争いの余波が、その周辺地域を襲うだろう。それが、こんな戦力外の奴らばかりの都市で起きたらどうなるかぐらい、言わなくてもわかるな」
理解した。これを知ったら元には戻れない、と言っていた理由が分かった。『私が死んだら』それを考えると、もうみんなとは？？？。
「敵の狙いは、まさにそれを起こすことにある。だから、お前が簡単に殺されないようにする手段を、いくつか考えた。その中の一つが、契約だ」
そう考えれば、確かに有効な手段だと思う。
「私が都市を出れば済むんでしょ？」
「まあ、それも一つの手だ。だがな、そう結論を急ぐ必要はない。いいか、いくつか考えた、と言っただろう。もう一つは、お前自身が強くなることだ」
「わたしが？」
予想外の案だった。
「そのために、わざわざこの空間を創ったのだからな」
この空間？言っている意味がまったく分からない。
「ここは俺の魔術で創った。これは、お前が騒ぐと面倒だと考えたから、こうなっているだけだ。実際は・・・こうだ」
彼が指をパチンと鳴らすと、周りの景色が一度歪んで戻ると、そこは貴族の邸宅の一室のような、趣のある、深い質感の家具が、見事な配置で置かれた部屋だった。
「・・・すごい」
これは、部屋にではなく魔術に対して。

「当たり前だ。そんなことよりも、契約がまだ終わっていない。するのか、しないのか、お前が選べ」
そんなの???
「そんなの、決まってるじゃない。するわよ、契約。まだまだ生きたいし、なにより、皆と一緒にいたい！」
「良い返事だ。ならば、『我もまた、汝との契約を求める』と唱え、俺と同じことをしろ」
「わかった。
???我もまた、汝との契約を求める」
と言って、気付く。アレをしなくてはいけないことに。
「どうした、顔が赤いぞ」
「ううん、な、なんでもない」
「そうか、ならば早く済ませろ」
彼の左手を凝視する。
「えいっ」
勢いをつけて左手にキスをした。
すると、私と彼の左手が光を放ち始めた。強烈な光は徐々に収束し、形を持った。
「指輪？」
「そのようだな」
薬指に現れたそれは、不思議な文様を浮かべていた。それをしばらく見た後、右手で触れてみる。
「あれ？」
抜けない。左手の薬指にはまっているという事実を、早々に亡き者にしたいと思ったのに、思いっきり引っ張っても微動だにしない。
「なにをしている？」
「これ、外れない」
「当然だ。契約魔具は契約を解除しない限り、そこに在り続ける。契約者の体に出現した場所から動かないのも常識だろう。これはどうしようもない、諦めろ」

「そんな～。これじゃ・・・」
『これじゃ、まるで婚約指輪みたいじゃない！』心のなかでそう叫んだ。
「気は済んだか？」
私とは反対に、まったく気にしていない彼の声で、動揺している自分がバカらしくなってきた。
「お前はこれで俺の契約者、つまり対等な地位を手に入れたことになる。俺のことはレイと呼べ。わかったな、ソフィア＝アークバイン」
「レイ？」
「そうだ。俺が認めた者には、そう呼ばせている」
「レイ」
「なんだ？」
「私も、ソフィアでいいよ」
「そうか・・・。
ではソフィア、魔具を解放してみろ」
「了解。って、どうすればいいの？」
指輪から、レイに目を移す。
「魔力を意識して流し、その名を呼べば解放できるはずだ」
そう言って、自分は解放を始めていた。
「〈終わりなき欲望の剣舞（Ｓｗｏｒｄｓ　Ｏｆ　Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　Ｄｅｓｉｒｅ）〉」
「剣なんて使えるの？」
「一通りな」
そう言って剣を振る彼は少し生き生きしている気がした。
「で、その名前はどこにあるの？」
「まずは魔力を込めろ」
すると、表面の文様が変化し、文字が表れた。
「それを読めば完了だ」
「〈咎人へ捧げる挽歌（Ｅｌｅｇｙ　Ｆｏｒ　Ｃｏｎｖｉｃｔｓ）

〉」
光が指輪を包み、その収束と共に現れたものは、二丁の拳銃だった。それと同時に何かが頭の中に流れ込んできた。
「分かったか？」
何が？と聞き返す必要もなく、何について訊いているのか理解できた。この魔具の使い方が、どういうわけか何もしていないのに、その形状、能力、効果にいたるまで、全てのことが手に取るように分かる。
「これが、契約魔具だ。お前の魔具は、なかなか面白い能力を持っているみたいだな」
この状況を楽しめる人って・・・。
「ああ、俺が何者か知りたいんだったな。俺は、エキドア公国軍、独立奇兵隊〈報復の剣〉の隊長だ。それから、俺とあいつのどちらが強いかは、見れば分かる」
「独立奇兵隊って、〈Ｓ／ｌａｎｋ〉以上の中でも、特に優秀な魔術師しか入れないっていう最強部隊？」
「そうだな」
「嘘。だって、〈報復の剣〉なんて隊、聞いたことないよ。それに、〈誣痲の剣〉が剣の名を持ってるから？？？」
「ああ、グレンのところか。だが、〈報復の剣〉があるのもまた事実だ。俺たちは隠された第二の矛として、敵を殲滅することが仕事だ。だから、隊の名前が、必ずしもお前たちの耳に入るとは限らない」
静かに、淡々と、事実だけを語っている。そんな気がする話し方だった。
「まあいいわ。じゃあ、歳は？」
レイはしばらく答えず、私の目を見たままだった。
「三百三十一と言って信じるか？」
はい？
「軍では二〇で通っている」

「軍には何年いるの？」
「約三百十年、というのも信じないだろうな」
「？」
「俺はバケモノだ、正真正銘のな。あのセルクセスでの惨劇の夜以来、俺は魔物になったんだよ」

Section9

〈セルクセスの惨劇〉、セルクセスで起きた史上最悪の大虐殺、一億以上の人間が一瞬にして消えた（・・・）とされている。それを行ったのが、人間よりも遥かに強力な魔術を使う種族、魔族だったとされている。だけど、魔族はその日を境に歴史から姿を消す。現在に至っても、魔族と接触した人間はいない。

「怖いか、俺が」

「こ、怖くなんか、ない」

バレバレの虚勢を張ってでも、怖いとは言いたくない。

「そうか。信じなくてもいいが、あの事件は魔族の仕業じゃない。人間が自分でやったことだ。確かに、惨劇と呼ぶにふさわしい出来事だったな。

生き残ったのは、わずか五人だけだ。そのうちの一人は、俺の妹だった。意識が戻って、最初に言われた言葉が『あなたは誰？』だ。記憶だけ持っていかれたらしい。まあ、記憶以外は無事だったのが幸いだったな」

重い沈黙がその場を支配した。

「それで、その妹さんはどうしてるの？」

質問してすぐに後悔した。

「おそらく、元気だろう」

ふう。心の中で安堵のため息をつく。でも、おそらく？　なんか引っかかる言い方だ。

「よし、修行を始めるか」

は？

「時間がないからな、いろいろ端折っていくぞ」

時間、時間・・・時間！

「そういえば、いま何時、というか学校行かなきゃ」

全然忘れてた。

右も左もわからない空間を駆け出そうとする。
「まだ、朝の四時だ。ここと現実では時間の流れが違う。あと一週間はここにいられるから安心しろ」
そんなすごい魔術、聞いたことないんですけど・・・。
「そういえば、レイってランクいくつなの？」
「〈ＳＳＳ／ｒａｎｋ〉だ。一応な」
「とりぷるえす・・・」
本当にいたんだ、〈ＳＳＳ／ｒａｎｋ〉の人って。
でも、そうすると一つの疑問が浮かび上がってくる。どうして、そんなに強い魔術師が、魔術師としては半人前にも満たないような私をパートナーに選んだのかということだ。いくら〈化身〉とやらのことがあっても、契約する以外の方法がいくらでもありそうなものなのに。
「とりあえず、魔力の使い方をやるとしよう。〈化身〉の魔力は、慣れないと加減が難しいからな」
でも、今は強くなるために、アイカたちといるために、頑張ろう。考えるのはいつでもできるんだから。
「聞いているのか？
まったく、さっきも言ったが時間がないんだ。無駄なことはするな。焦る必要はないが、もっと慌てろ。意識するだけで能率は上がる。修行はただでさえ厳しいものだ。それを短期間に凝縮することの意味を考えろ。それに耐えられるだけの意志はあるか？」
「ある！
さっきも言ったけど、まだまだ生きたいし、アイカたちと一緒にいたいんだから。どんな辛い修行にだって耐えてみせるわよ」
「いい返事だが、修行が始まってから同じ台詞が吐けるか見物だな」
「見てなさいよ。絶対強くなって、あのウェルトとか言う変態を倒してやるんだから」
つい、買い言葉が出てしまった。
「楽しみにしておこう」

Section10

???光と闇、秩序と混沌、生と死。
この世界は、様々な要素によって構築され、支えられている。
人間もまたその一端を担う、歯車の一つでしかなく、
世界という名の支配者の前に跪く運命にあるのだ。
君よ、希え。新たな世界、新たな運命を???。
創造に勝る破壊はない。
新たな世界は、必ずや君を、君を縛る全てのものから解放するだろう。
君よ、希え。新たな世界の始まりを???。
???ハイゼン＝ストラウス作
「魔爪」序章より抜粋???

接敵

何かが右から飛んでくるのを感じ、回避行動をとった。それを見越していたかのようにそれはその場で弾ける。
「うっ」
衝撃に吹き飛ばされながら、空中で体勢を立て直し、次の襲撃に備える。それは、すぐに来た。今度は後ろから、さっきの失敗を活かして避けるのではなく、相殺する。
「十、百と重なりて敵を切り裂く刃となれ。
???風の波濤???」
素早く呪文を唱え、魔術を完成させる。相殺するとは言ったけど、実際は誘爆させる程度で十分なはず。案の定、飛んできたものは風の刃とぶつかり、私に届くことなく爆発した。
さあ、反撃よ！
「風よ、其に触れる我が敵を知らせよ。

??風の啓司??」
！
風が知らせた敵の位置は、私の真上だった。すぐに防御魔術を発動させるが、間に合わない。
「足を止めるなと言ったはずだ」
いつの間にか、鉄の鎖が体の自由を奪っていた。
「風は他の属性に比べ、絶対的な破壊力に欠けるが、その機動性は抜きん出ている。よって、常に動き回り相手を攪乱し続け、隙をつくりそこを攻めるのがセオリーだ。だから、足を止め、敵に捕捉されたら負けだ」
それは分ってるけど、実際にやるのは難しい。
「今日で五日目、明日から契約魔具も使う。今日中に風の特性を活かせるようにならないと、〈魔爪〉のメンバーを倒すなど夢のまた夢だぞ」
「言われなくても、わかってるわよ」
「結果で示してもらいたいものだな」
レイはそう言って、拘束を解く。
「無策に逃げ回っているだけでは、風の特性を理解しているとは言えない。三十分だけ待ってやる。自分と、風の特性を見直せ」
考えれば考えるほど、自分と風の相性が悪い気がしてならない。はっきり言って、こそこそ逃げながら戦うなんていうのは性に合わない。
「どうせなら、それこそ嵐みたいに戦いたいなあ」
「やっとか」
「へ？」
「やっと理解したのかということだ。確かに、並の魔術師が風を使うならば、さっき言ったように戦うのがベストだ。だが、お前は普通じゃない」
「〈化身〉？」
「そうだ。その特殊な性質と豊富な魔力。それらがあれば、嵐を体

現した戦い方も十分可能だ」
あれ？でも、私が〈化身〉なのはいいとしても・・・。
「豊富な魔力って？」
「気付いてなかったのか・・・」
はあ、とレイは大きなため息をつく。
「お前の先天的な魔力量は、通常の魔術師の魔力の三倍ほどある。これも〈化身〉の特性かもしれんな」
なにやら考え深げにしているレイは、すっかり自分の世界に入っている。
まあ、なにはともあれ、私の戦闘スタイルは決まったみたいだ。これからは思うように戦える。そう思うだけでうずうずしてくる。
「よし、じゃあもう一戦！」
「ああ、やらずに今日は終わりだな」
・・・はい？
「どうした？」
「どうしたもこうしたも、時間ないんでしょ？だったら、休んでる暇なんてないじゃない！」
「安心しろ。明日は休みなしだ」
「・・・」
「なんだ、もっとうれしそうにしたらどうだ？希望通りにしてやったんだ、明日は死ぬ気で修行に打ち込め。その分、今日は休んでおけ」
と言い残して、さっさと立ち去ってしまった。
「ああ、もう！」
この五日間でわかったことがある。それは、レイが何を考えているのか、私にはわからないということだ。たぶん、これはこれからも変わらない気がする。
「お言葉に甘えて、休ませていただきます！」
精一杯大きな声で、レイが消えていった方へ叫ぶ。

「おい、ニヒル」
その声に足を止める。ニヒルの意味は0番目、この組織に与えられた仮初の名、二十一席の外、自由、遊撃の称号である。
声をかけてきた男は、漏れ出している魔力だけでも並の魔術師以上だというのに、わざわざ威嚇のために発散することで、その妖気と言っても差し支えない魔力が空間を浸食している。
「手間取ってるらしいじゃねぇか、助太刀にいってやろうか？」
「お前は誰だ？」
「ハッハー、言ってくれるじゃねぇか」
そう言って男は顔を歪ませた。
「てめぇと同じ〈魔爪〉のセクスだ。よ～く覚えとけよ」
「そうか」
そう言って歩き出すと、男は俺の正面に立ち塞がった。
「邪魔だ」
「どうせならよぉ、俺も活きのいい獲物とヤリたいわけよ。つまり、その小娘の叫び声を聞きたいんだよ」
標的はくれてやってもよかった。弱いものと戦うのはつまらないからだ。が、標的を守っていた男はなかなかおもしろそうな奴だった。
「お前にくれてやるつもりはないな」
すると、一枚の紙片を目の前に突き出してきた。
それを受け取り、内容を確認すると同時に火をつける。
「わかったか？
小娘は、俺様の獲物だ」
そう言うと、夜の闇を白く染める稲光とともに消えた。
手の中で燃えるそれをしばらく眺め、自身も燃え尽きるかのように炎の中に消える。
後にはただ、街灯と、それに照らされ明滅する路地が残るだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4742k/

Ray

2010年10月8日20時41分発行